芦名定道

前期：現代キリスト教思想研究１――近代から現代へ

オリエンテーション――現代キリスト教思想の諸動向

１．西欧近代とキリスト教

２．自由主義神学１――シュライアマハー

３．自由主義神学２――リッチュルとハルナック

４．自由主義神学３――トレルチ

５．ヘーゲルとヘーゲル主義

６．近代聖書学と宗教史学派

７．キリスト教と社会主義

８．弁証法神学１――バルト

９．弁証法神学２――ブルトマン

１０．弁証法神学３――ティリッヒ　6/27

１１．解釈学的神学とブルトマン学派　7/4

１２．研究発表：岡田勇督、齋藤伎璃子　7/11

１３．研究発表：山田奈緒美、張旋　7/18

１４．研究発表：山下毅、山本恵美　8/1

＜前回＞バルト

（１）弁証法神学の意義

１．**「弁証法神学」**（寺園喜基）、『岩波　キリスト教辞典』より

（２）バルト神学

４．19 世紀の近代社会に埋没したキリスト教とその神学（自由主義神学）に対する徹底的な批判（戦争神学批判）とそれによるキリスト教の本来の在り方の取り戻し。

・フォイエルバッハの宗教批判の真理性。

・神学は固有の方法と基礎の上に形成されねばならない。

５．神と人間との絶対的な質的差異、神の下における人間の危機　→　危機神学

７．アンセルムス論と神学の方法：知解を求める信仰、信仰固有のラチオ（神学固有の学問性）の展開としての神学。神・啓示から。楕円に対する円＝キリスト論集中。

神の言葉の神学、教会教義学

８．1930 代以降：ナチス・ドイツ的キリスト者に対する教会闘争を指導・バルメン宣言

・弁証法神学を超えて、『教会教義学』（KD、「神の言の神学」）へ

・教会闘争、自然神学論争（ブルンナー）

９．宗教と啓示との峻別

宗教：神・救済へ向かおうとする人間的努力＝自己救済の試み、不信仰としての宗教

11．まとめ

(1) フォイエルバッハの宗教批判へのキリスト教神学からの応答の一つの典型。

(2) 近代のキリスト教とその神学の問題性を鋭く捉え、キリスト教と神学の固有性を再確認した。神学にはその固有の論理と方法がある。

(3) フォイエルバッハの宗教批判に十分に答えたことになるのか。

フォイエルバッハ問題は終わらない。

(4) 宗教は不信仰な人間的努力という評価は、キリスト教の自己批判としてはわかるとしても、他の諸宗教を一方的に一括して扱うのは正当なやり方と言えるか。バルトの立場からは、他の宗教との対話などあり得ない？！。

(5) ドイツ教会闘争における批判力。

戦後におけるバルトの権威化　→　バルト主義の弊害

バルトとバルト主義との相違

(6) 自由主義神学の過度の否定。

神学思想、とくに歴史的研究への否定的影響。聖書学と神学との亀裂は深まった。

↓

近代とキリスト教との区別の確認、その上で、近代との関わりを再構築すること。

９．弁証法神学２――ブルトマン

「ブルトマン(Rudolf Bultmann, 1884-1976)」(大貫隆)

ドイツのプロテスタント神学者、新約聖書学を中心に『共観福音書伝承史』(1921)、『イエス』(26)、『信仰と理性』(33-65)、『ヨハネの福音書』(41)、『新約聖書と神話』(41)、『新約聖書神学』(48-53)などの代表作。19世紀までのイエス伝研究の史実主義の限界を明らかにした上で、生前のイエスが述べ伝えた使信（ケリュグマ）と原始教会がイエスについて述べ伝えた使信に共通して含まれる実存理解を取り出し、それとの出会いと決断を促す「使信の神学」を唱道。古代の神話的な表現で書かれている聖書本文の背後にある実存理解に迫るための積極的な方法としての「非神話化」。『ヨハネの福音書』と『新約聖書神学』はその実践。

（１）ブルトマンと非神話化

１．聖書学者ブルトマン　→　バルトの弁証法神学への関与以降も、自由主義神学との関わりを保持。

２．近代的世界観と聖書的世界観（黙示文学、グノーシス主義＝神話論）との対立

近代人は聖書的な宗教を信じうるか？

→　信仰と世界観との関連はいかなるものか、両者は分離可能か。

３．聖書の非神話論化(Entmythologisierung)と実存論的解釈

４．キルケゴールの真理論：客観的真理と主体的真理

信仰と世界観との区別・分離　→　信仰の主体性の純化

５．聖書を非神話論化することによって、実存論的解釈によって、主体的真理を取り出す。

世界観という形式ではない仕方での信仰の表現。

ハイデッガー哲学（『存在と時間』）の枠組み（本来性・非本来性）

創造物語：古代人の天文学や生物学の理論ではなく、神の語りかけに聴従し応答する人間。

人間存在の善性のメッセージ、信仰とは神の語りかけに対する「今ここ」の決断。

６．説教というモデル（プロテスタント・ルター派的？）

７．ブルトマンの問題点

・信仰と世界観とは分離可能か、分離すべきか。形式と内容の分離？

決断の抽象化

・神話あるいは構想力の理解が一面的ではないか。

神話は過去の遺物か、構想力の解放性についてブルトマンは理解しているのか。

・近代的世界観あるいは個人主義的信仰を自明の仕方で前提にしていないか。

科学技術や個人主義への批判はブルトマンから可能か？

（２）ブルトマンの信仰論の要点

①言葉の出来事性→語りかけ→言葉における継続・出会い→応答・決断

②時間性－終末論的（そのつどの今）→決断・聴従

③理解：神理解－自己理解（神学－人間学）

④実存的な自己理解（自己の存在可能性）と歴史的知識・世界観との相違

⑤客観性→主観性・主体性

→自由の処理できない・神の主権

（３）引用資料

A. Glauben und Verstehen 1（著作集 11）

１.「神を語ることは何を意味するか」（１９２５）

「～に関して語ること」は、常に、語られるものの外にある立場を前提とする。

語り手の具体的・実存的状況とのかかわりなしに真であるような一般的命題・一般的真理として神を語ることはありえない。(34)

体験や内面生活は、われわれはそれを客体化するやいなや、実存的性格を失っています。

そうした関連が失われると、この命題は、神が人間と全く別なあるもの、形而上学的実体、霊界、……要するに非合理的なものであることを意味しうるにすぎない。(37-38)

この世界の統一的連関の中で理解しうるものを現実的と見なす。(39)

この世界像は、われわれ自身の実存から目をそらしたところで立案されている。そこでは、われわれ自身は、諸々の客体の中の一つの客体と見なされ、われわれの本来の実存への問いから目をそらして獲得されたこの世界像の連関の中へくみこまれる。人間を加えて完成させた世界像を人は通常、世界観(Weltanschuung)と呼ぶ。(39)

５．新約聖書のキリスト論

パウロの研究が認識した神話論的表象は、それとどのように関係するのか。救いの生起とキリスト教的実存の神学的説明はすべて、同時代の概念性の中でなし遂げられる。その説明は、常に人間とその世界について語ることでもあるから、伝統的な人間学的・宇宙論的概念の中を動く。そのような概念は時の流れに沿って変化するので、パウロも神学やキリスト論も、批判ぬきでは理解されない。(296)

６．新約聖書における神の言葉の概念

説教は聴くものの良心に向けられる。

人間についての理論的教えではなく、語りかけの生起が、実存的自己理解の状況を、

実際にとらえるべき自己理解の可能性を人間に開くのである。語りかけは、あれこれを任意に選択させるのではなく、決断を迫る。(316)

説教は信仰を要求する。(317)

解釈は、有意義に遂行されるとすれば、当時の状況に応じてはめこまれていた神話論的概念性から実際に解き放たれ、それによって本体の意図が認められるようにならなければならない。

形而上学的意味での神子性、処女降誕、先在、最後のらっぱの響きと共に雲に乗ってくる再臨などの諸表象は、確かに神話論である。しかし、神がキリストの十字架を通してこの世にゆるしを与えたという思想も、神話論として除去されて良いのであろうか。……除去されるべき神話論はどこまでであろうか。それはキリスト教信仰にとってどこまで本質的なのであろうか。

神話論を除去するための批判的基準が与えられないだろうか。(357-358)

B.Glauben und Verstehen 2（著作集 12）

１.「新約聖書およびギリシア精神における世界と人間の理解」（１９４０）

信仰は世界観ではないということである。というのは、世界観というものはそれぞれ自分の運命を世界と人間との普遍的な理解を根底として、その普遍的事象の一事例として理解しうるものにしようとするものである。新約聖書の考え方によれば、わたしはそうした普遍的状況において、わたしの真の実存を獲得するのではなく、いま、ここでという具体的状況において、すなわち自己を得るか、失うか、見定めがたい状況のなかで、自分の実存を獲得するのである。これは、わたしは、単独者として神の前に立つということなのである。(101)

信仰は、あらゆる未来の先取りとして、人間の非世界化を意味し、終末論的実存への転換を意味する。(110)

なんらかの総合、またこの二つにまたがる秩序の不可能性ということこそ、まさに、キリスト教的実存が終末論的実存であることのしるしなのである。

キリスト教の側からの世俗的科学への抗議というものは存在しない。なんとなれば、世界の終末論的理解は、世界説明の方法ではなく、非世界化は、世界解明においてでなく、ただ瞬間においてのみ完遂されうるものだからである。(113

C. Glauben und Verstehen 3（著作集 13）

４.「キリスト教的希望と非神話化の問題」（１９５４）

両方の希望像がーヘレニズム的グノーシス的規模有象と同様に、ユダヤの希望像がー神話的な希望像であることは疑いのないことである。

これら二つの世界像は、神話的な古代の世界像と結びついている。

現代の人間にとっては、この神話的な表象の仕方は縁遠いものとなった。(111)

そういう人間の実存の本質についての見解が、それどころか知が神話的諸表象の基礎になっているかという、いわゆる非神話化の問題である。(113)

世俗化による非神話化：マルクスやヘーゲルにおける歴史的発展とその目的の像は、非神話化され、世俗化された原始キリスト教的終末論である。(114)

人間の内面において、決して到達されない将来が確かに事実上そのつど現在となったのである。この場合、古い神話的希望像は世俗化されたのではなく、霊化されたのである。（114）

６．「科学と実存」（１９５５）

われわれを取り巻く世界やわれわれの出会う世界のもろもろの現象や、自然、歴史、人間、そして人間精神の方法論的研究を、われわれは科学と呼ぶ。

独特に人間的な生き方を実存と呼ぶ。

科学は、諸現象を認識しようとすることによって、諸現象を思惟の対象とし、諸現象を「対象化する」。（139）

科学においては、対象化する思惟は首尾一貫しており、方法論的に形成されている。（140）

客観化する叙述が生じ得ないような実存的理解が存在する。（149）

人格的存在は実存的出会いに対してのみ開く。（150）

実存はそのつど、瞬間の諸々の決断における出来事であることを意味する。

客観化する思惟は、この思惟の対象が属している対象領域の連関からその対象を理解する。（153）

このことは、神学に対しては神についての主張は客観的主張としては可能ではないという洞察に結果することになる。

神については実存からのみ、おそれとおののきのうちに、感謝と信頼の内に語られ得るのみである。（155）

９．「ルネ・マルレに問う」（１９５６）

神話的思惟と現代的思惟の対立を強調した際にいつも私は、両者の間に共通性が存することに、つまり両者共に客観化するような思惟であり、したがってある意味で神話的思惟は素朴であっても科学的な思惟と呼ばれうる点に共通性が存在することに、実際どんな疑いをもはさまなかったのである。（227）

新約聖書の帰省の諸々の物語の実存論的意味は明白にされることができ、現代の人間の人格的生は客観化する思惟の対象ではあり得ない。（227）

<u>D.Glauben und Verstehen 4（著作集 14）</u>

４．「非神話化の問題によせて」（１９６３）

未来への開放性、将来的であるということ

歴史についての実存論的解釈が歴史的（historisch）な過去の客体的観察を必要とすることは、まったく疑問の余地がない。（171）

歴史科学は、歴史過程を、客体化の視線をとおして一つの完結的な作用連関として理解するのであり、その限りにおいてそれ自体非神話化を行っているのである。（171）

神話の位置づけに関しては、自然科学との間に根本的な違いがある。すなわち、自然科学は神話を排除するが、歴史科学はそれを解釈しなければならない。歴史科学は確かに一つの歴史的現象である神話論的叙述の意味について、問いを提出しなければならない。（172）

原始科学的な、したがって事物を客体化する思考は、事実すべての神話論に共通のも

のである。

神話論的思考はしかし、素朴な仕方で彼岸を此岸に対象化する。……非神話化の試みは、これに対して神話の本来的意図を貫徹させようとする。すなわち、人間の本来的現実について神話それ自体に語らせようとするのである。(173)

決定的なことはそうした比喩や象徴が現実的に一つの意味内容を含んでいるということなのであり、それを明らかにすることこそ哲学的、神学的省察の課題なのである。したがって、こうした意味内容がここでまた神話論的言語で表現されることはあり得ない。なぜなら、もしもそうだとすると、またしても解釈されねばならず、それは無限に続けられることになるからである。

神が客観的に確認されるこの世の現象でない以上、神の行為についてはただ、それとの邂逅をとおして生じる我々の実存について語るという仕方でのみ語りうるに過ぎない。神の行為についてのこうした話法を、我々は「類比的」と名付けよう。(174)

この命題は逆説が含まれていることになる。なぜなら、それはこの世の出来事と彼岸における神の行為との逆説的同一性を主張するからである。(175)

この逆説は、歴史的な出来事が、同時に終末論的であるという主張に通じる。(176)

６.「イエス・キリストと神話論」（１９５８）

＜参考文献＞

１．ブルトマン『ブルトマン著作集』新教出版社。

２．熊澤宣義　『増補改訂　ブルトマン』日本基督教団出版局。

３．笠井恵二　『ブルトマン』清水書院。

４．土屋博　『教典となった宗教』北海道大学図書刊行会。

５．ティリッヒ『キリスト教思想史II』（著作集別巻３）白水社。

６．Ｈ・ツァールント『20世紀のプロテスタント神学（上）（下）』新教出版社。

７．Ｊ・モルトマン『二十世紀神学の展望』新教出版社。

８．森田雄三郎　『キリスト教の近代性』創文社。

９．田辺元「死の存在学か死の弁証法か」(『死の哲学　田辺元哲学選IV』岩波文庫)。

10. 武藤一雄「第四章　終末論の問題」「第一節　現代神学における終末論―特にシュヴァイツァーとブルトマンについて―」(『神学と宗教哲学との間』創文社)、「解釈学的原理としての「中」について―「非神話化」論と関連して―」(『宗教哲学の新しい可能性』創文社)

11. 辻村公一「ブルトマンとハイデッガー」(『ハイデッガー論攷』創文社)
http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/147413